

平成 30 年 5 月 18 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380921

研究課題名(和文) 国際比較とエビデンスによる日本型スクールカウンセラーの実践力育成プログラム

研究課題名(英文) Developing practical training in school counseling using evidence-based methods and international comparisons

研究代表者

伊藤 亜矢子 (Ito, Ayako)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：50271614

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：スクールカウンセラーが学校全体に支援サービスを提供するためには、個人面接だけでなく、教師とのコンサルテーションや心理教育など、多様な活動が必要になる。個人面接に慣れた心理臨床家であっても、学校という場で多職種で連携して支援を行うことや、予防成長促進的な支援が求められることに戸惑う場合も少なくない。そこで本研究では、学校独自の要素である学級のアセスメント方法や、生態学的な視点に基づくコミュニティアプローチを学ぶワークブックの作成など、スクールカウンセラーの実践力向上に資する知見を、国際比較等を基に検討した。

研究成果の概要(英文)：School counselors are expected to perform many different activities. These include not only individual counseling but also consultations for teachers and classroom-based mental health education programs for supporting the whole school. Even skillful counseling practitioners might be confused about how to accomplish prevention and promotion in school settings by collaborating with multidisciplinary staff. In this research, the tools and strategies that are particularly necessary for school counselors to improve prevention and promotion in the whole school, including classroom assessment methods and workbooks used by school counselors for community approaches, were developed through international comparison and other methods.

研究分野：学校臨床心理学

キーワード：スクールカウンセリング 全校型支援 コンサルテーション スクールカウンセラー養成 学級風土 国際比較

1. 研究開始当初の背景

非常勤心理職を特徴とする日本型のスクールカウンセラー(以下 SC)は、見立てや教師コンサルテーションに強い一方で、学級アセスメントや心理教育など、学校現場特有の教育職的なアプローチに弱いことが指摘されてきた。特に初心の SC には戸惑いの声も多かった。

他方、筆者は、支援ニーズの高い生徒を学校生活から切り離して支援するのではなく、学校コミュニティ全体を支援の対象として多様な支援ニーズに応える全校型の支援を志向し、国際比較や学校に適したアセスメントツールの開発(伊藤・松井, 2001; 伊藤, 2009)や、予防的支援のための心理教育ツールの開発などを行ってきた。

そこで、本研究では、そうした全校型の支援を促進するツールの普及版と訓練プログラムを考案することで、SC の実践力育成につなげることを考えた。

2. 研究の目的

具体的には下記を行うこととした。

<研究1> 全校型モデルによる SC のワークブック作成 これまでのテキスト出版や日韓 SC のトレーニングニーズ調査、米国・香港・フィリピン等の研究者との協議等から全校型モデルの理解と自校への応用が学習できるワークブック作成を行う。

<研究2> 普及版の心理教育およびアセスメントツールの作成

SC の Focus グループの意見や実践研究を基に、授業案の作成やリハーサルなど、より実践的基礎的内容を既存ツールに盛り込んだ普及版の心理教育ツールおよびアセスメントツールを作成し、公募 SC による試用までを行う。

<研究3> 普及版の新版学級風土アセスメントツールの作成

現有の分析ソフトを、平成 25 年度収集の 200 余学級 7000 人余データによる再全国調査を基にリニューアルする。次に同年度の延べ 200 学級超のフィードバック事例を基に、事例の整理と類型化を行い、初心 SC にコンサルテーションをガイドするワークシート等を開発する。

<研究4> トレーニング・プログラムの構築

上記研究 1 ~ 3 を併せて、全校支援の理論と実践ツールの活用を最小の時間で学ぶ総合トレーニング・プログラムを作成し、初心および経験者 SC の各 Focus グループでの試行等を通じて改善する。

3. 研究の方法

<研究1> 全校型モデルによる SC のワークブック作成では、次のことを行った。25 年度に実施した SC のトレーニング・ニーズ調査(有効回答 246 部: SC 活動・職務ストレス・燃え尽きに関する計 80 項目)の分析から、SC 養成と学習に関する課題を抽出し、ワーク

ブックやトレーニング・プログラムに必要な事柄について考察した。加えて、経験のある SC のグループや、教師、大学院生から、SC についての学習ニーズおよび、学び方についての意見を収集した。それらを踏まえて現役 SC を対象とした研修会(計 7 回)を通じて、教材を作成し、学会発表等を通して検討・改善を重ねた。これらを踏まえて、ワークブックを作成した。

<研究2> 普及版の心理教育およびアセスメントツールの作成では、中学校にて 8 回のシリーズとして心理教育を実施し、その過程で準備や実施に必要な事柄をまとめると同時に、他の研究者と共同で、SC(学校臨床心理士)の心理教育における役割等を検討した。さらに、マルチアセスメントツールについて、日本版の妥当性検討について英語論文にまとめ、さらに同ツールの新版を翻訳し高等学校計 7 校で実施した。

<研究3> 普及版の新版学級風土アセスメントツールの作成では、平成 25 年度収集の 7000 余人のデータの分析を重ね、新版の尺度を完成し、のべ約 200 学級に実施して、コンサルテーションでの有効性や、コンサルテーションシートの改善を行った。

<研究4> トレーニング・プログラムの構築では、計 7 回の役 SC の研修会において、学習ニーズ、プログラムや教材の検討を行った。米国の SC 養成大学の SC プログラムへの参加と、同大学と本学との共同授業を通して、米国型の SC 養成プログラムを実践的に学ぶと共に、共同授業でのプログラム開発を通して、米国側研究者や参加学生からの意見を含めて、プログラム(特に多文化スキル)について検討した。研究 1 から研究 3 の成果および上記を合わせて、学習に必要な要素を、米国 SC 活動モデル(ASCA モデル)を踏まえて多次元に整理し、既存の日本のテキストと比較検討すると共に、その内容を研究 1 で作成したワークブックに反映させた。

4. 研究成果

<研究1> 全校型モデルによる SC のワークブック作成では、下記の成果が得られた。

SC のトレーニング・ニーズ調査から、校内での支援チームの形成や教職員との情報交換が可能なこと、SC から積極的に教職員に意見を伝えられることや、支援体制づくりや心理教育に関与できることが、校内での活用に繋がっていること、また、カウンセリングやコンサルテーションといった SC 活動の基本となることなどがらで躓いている SC もおり、それらの基本技能に加えて、SC の役割や意見を教職員に説明できることや、日常の授業や 1 年を通じての指導を通して生徒を支援したいと考えている教師のニーズに応えて教師と協働できる力が、SC の燃え尽きを防ぎ、校内での活動を支えることが明らかになった。

経験のある SC や初心の大学院生等からの意見からは、個人カウンセリングなど 1 対

1の介入から視野を広げて、学校全体が持つ支援の機能や、学校だからこその支援についての知識経験について、十分に認識することがSC活動には必要とされる一方で、それらについて具体的なイメージを持ちながら理解することに難しさがあることが明らかになった。また、初学者にとっては、SC活動についての疑問が、待遇から制度、歴史、実際の動きなど、幅広く多岐にわたり、SC活動の理解の基本として、多様な観点から知識を得ることが必要であることが明らかになった。また、それらの多岐にわたる疑問を整理する枠組みとして、米国SC協会のSC活動についてのモデル(ASCAモデル)の枠組みが有効である可能性が示唆された。

これらを踏まえて、現役SCの研修会を通して教材開発等を行った。学校全体が持つ支援の機能や学校だからこその支援については、具体的な事例にそって、暗黙の前提としていわばそこに埋め込まれている学校が持つ機能等について、あえて探だし意識化するワークが有効であり、学校全体でさまざまな要素が結びつき連動していることなど生態学的な見方については、理論面だけでなく、図による理解や、自験例に照らして、そうした見方の有効性に気付くワーク等が有効であることが明らかになった。

以上のまとめとして、蓄積したワークをA4版約65ページのワークブックにまとめた。<研究2> 普及版の心理教育およびアセスメントツールの作成では、公立中学校で8回シリーズの心理教育を行った。学校・学年・学級・個人という多層なニーズをアセスメントした上で、行事等の1年間の学校生活の流れから生じるその時々トピックやニーズ、学校や学年の教育目標を踏まえて、それらに安全に応える学習内容の検討が必要であること、そうした学習内容に応じ、かつ、発達段階や当該生徒集団の理解力や興味に応じた学習教材を選定することや、単発の授業で終わらせず、その後の学級経営に学習内容を引き継いで発展できる工夫が必要であった。多忙な教職員の負担を軽減するためにも、最小限の打ち合わせでこれらの条件を満たすには、SC側が、的確なアセスメントを行えることや、1年間の行事等で生じやすいトラブルと対処への知識を持つなど、SC側の準備状況が重要であること、授業をセグメント化して、ある程度授業のパターンを固定することで、授業もしやすく、教材づくりも容易になることが明らかになった。さらに、他の実践者と共同しての検討でも、校種や実施者(SC単独・教師単独・SCと教師の共同授業)など多様な展開があり得ることと、いずれにおいても、上記のようなアセスメントとニーズに応じた教材の検討やシリーズ化が有効であることが明らかになった。

さらに、マルチアセスメントツールについては、日本版の妥当性検討が英文学術誌に掲載された。また、高校で実施した新版につい

ても、個々人のニーズだけでなく、学年や学校全体としての支援ニーズの検討が可能であること、特に、不足の点だけでなく、生徒および生徒集団の「強み」についてもアセスメントできることで、学校・学年の長所やそれを発展させるための指導についてもフィードバックできる点が、学校で活用するツールとして、有益な点として指摘されえた。

<研究3> 普及版の新版学級風土アセスメントツールの作成では、平成25年収集のデータをマルチレベル分析の枠組みで分析し、完成した新版質問紙について学会誌に投稿し掲載された。新版においては、これまでと同様の8下位尺度に加えて、それらをさらに分割して、学級全体としての情緒的特徴と行動面での特徴などをより具体的に明らかにできるような尺度構成とした。これにより、学級のより具体的な像を短時間で明確に伝えることができ、コンサルテーションに必須の、学級のイメージの共有が、コンサルタントとコンサルティの間でより容易に行えるようになった。また、これらの結果について、シンプルな工程で結果を算出できる分析プログラムを完成した。さらに、学級の強みと課題、および、その背景にある学級経営の具体的な工夫を明確化できるコンサルテーションシートを作成した。

<研究4> トレーニング・プログラムの構築では、これら研究1から研究3までの成果に加えて、米国のSC養成大学との共同授業を含む学術交流により、当初想定していなかった多文化理解スキルを含む、養成プログラムの骨子を明確にできた。特に、多文化理解スキルについては、従来から指摘されてきた学校と心理臨床の違いについても、文化理解の枠組みで考えることにより、両者の違いを対立的なものとしてではなく、相互理解のスキルも含めて学習できること、現在の多様な生徒を有する学校現場においては特別支援や海外にルーツを持つ子どもの支援も含めて、多文化理解スキルが有効であること、また、そうした視点を身に着けるためには、理論面だけでなく、実際に異なる文化に身をおいて実感的に学習できるエマージョン学習が、SC養成においても効果的であることが得られた。

今後は、これら一連の成果を踏まえて、体験的な学習と、理論面、また、自らの疑問を整理し深めながら、有効なスキルを身に着けられる自習教材やテキストなどが必要と考えられる。特に、研究1・4の成果からは、SC養成に歴史のある米国SC協会の活動モデル(ASCAモデル)が、その内容そのものというよりも、日本での学習者の疑問を整理し、より実践的な学習を体系的に学ぶための枠組みとして有効であることが得られた。こうした枠組みを用いた、学習要素のさらなる整理や教材開発、また、チーム学校の方向性を踏まえ、コンサルテーションとその基礎となる実践力の基盤を養成すると同時に、個々の

コンサルテーションを丁寧に行いながら、校内での教職員との協働を深め、校内の支援体制を実質的に充実させていく SC 活動について、さらなる具体的な知見の整理と養成プログラムの検討が必要と考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

伊藤亜矢子・宮部緑(2018). 特集学校のアセスメント入門 学級のアセスメント 学級風土を見立てる, 子どもの心と学校臨床, 18 遠見書房, 64-71.

伊藤亜矢子(2018). 特集学校のアセスメント入門 学校で見立てる、学校を見立てる 援助職のための学校アセスメント総論, 子どもの心と学校臨床, 18 遠見書房, 3-10.

伊藤亜矢子(2017). 特集スクールカウンセラーの個人面接 学校コミュニティの中での実践と課題 養護教諭・教師への対応 個人面接, 子どもの心と学校臨床, 16 遠見書房, 91-98.

伊藤亜矢子(他5名 6番目)(2017). 高等学校における「学校全体メンタルヘルススクリーニング」の実践, 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 査読有, 52, 47-54.

http://www.my-kokoro.jp/books/research-aid-paper/vol52_2016/pdf/mykokoro_research-aid_paper_52_06.pdf

伊藤亜矢子・宇佐美慧(2017). 新版中学生用学級風土尺度(Classroom Climate Inventory;CCI)の作成, 教育心理学研究, 査読有, 65(1), 91-105.

DOI: <https://doi.org/10.5926/jjep.65.91>

伊藤亜矢子(他4名 1番目)(2016). 米国のスクールカウンセラー養成に学ぶ: ニューヨーク工科大学多文化スキル・サマーセミナーの体験から, お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科附属心理臨床相談センター紀要, 査読有, 17, 77-88.

<http://hdl.handle.net/10083/59726>

Ito, A.(他4名 1番目)(2015). "Validation and Utility of the Social Emotional Health Survey: Secondary for Japanese Students." Contemporary School Psychology, 査読有, 19(4), 243-252. <https://link.springer.com/article/10.1007/s40688-015-0068-4C>

Ito, A.(他3名 3番目)(2014). "Cross-Cultural Validations of the Factor Structure for the Korean Version of Classroom Climate Inventory (CCI)." Japanese Psychological Research, 査読有, 56(4), 349-360.

DOI: <https://doi.org/10.1111/jpr.12062>

Ito, A.(2014). "School Counselor's roles and challenges in Japan." The Journal of Asia Pacific Counseling, 査読有, 4(2), 113-129.

DOI: <https://doi.org/10.18401/2014.4.2.4>

[学会発表](計26件)

宮部緑・半田知佳・初澤宣子・伊藤亜矢子(2018). 「スクールカウンセラー便りの掲載事項にみる特徴」日本心理臨床学会第37回秋季大会 2018年8月30日~9月2日 神戸国際会議場他(兵庫県).

南杏佳里・飯田順子・伊藤亜矢子(2018). 「強みの認識が高校生のスクール・モラル及び生活満足度に与える影響の検討」日本心理臨床学会第37回秋季大会 2018年8月30日~9月2日 神戸国際会議場他(兵庫県).

Iida, J., Watanabe, N., Ito, A., Aoyama, I., Endo, H., Sugimoto, K. & Kuwahara, C.(2018). Validation of the Social Emotional Health Survey-Primary among Japanese Elementary School Student, 40th ISPA, Tokyo Seitoku University, July 25-28, 2018(東京都).

Furlong, M. J., Ito, A., Xie, J. S. & Palikara, O.(2018). Roundtable, Project CoVitality: Universal Wellness screening in California, 40th ISPA, Tokyo Seitoku University, July 25-28, 2018(東京都).

Ito, A.(2018). Classroom Climate Consultation; Demonstration and discussion of the implication of the Classroom Climate Inventory, 40th ISPA, Tokyo Seitoku University, July 25-28, 2018(東京都).

Ito, A. & Dahir, C.(2018). The ASCA Model: Impacting Japanese School Counselor Training Evidence Based School Counselor Conference 2018, March 19-20, 2018, New York Institute of Technology.

伊藤亜矢子(2017). 「スクールカウンセラーが燃え尽きないために学ばべきことは何か スクールカウンセラー調査から得られた実践の課題」日本心理臨床学会第36回秋季大会 2017年11月18日~21日 パシフィコ横浜(神奈川県).

宮部緑・伊藤亜矢子(2017). 「教師の学級風土認知を構成する要素の検討 教師コンサルテーションでの教師理解に向けて」日本心理臨床学会第36回秋季大会 2017年11月18日~21日 パシフィコ横浜(神奈川県).

伊藤亜矢子(2017). シンポジウム「学校適応はどのようにとらえられるのか(9) 小学校における学級への適応と教師の影響」指定討論者, 日本教育心理学会第59回総会, 2017年10月7日, 名古屋国際会

議場.

Ito, A., Iida, J., Yokohari, A., Aoyama, I., Sugimoto, K. & Endo, H. (2017). Validation of the Social Emotional Health Survey among Japanese High School Students Part 2; Ecological Validity. International School Psychology Association Manchester, July 19-22, 2017, Manchester Metropolitan University.

Iida, J., Ito, A., Yokohari, A., Aoyama, I., Sugimoto, K. & Endo, H. (2017). Validation of the Social Emotional Health Survey among Japanese High School Students. International School Psychology Association Manchester, July 19-22, 2017, Manchester Metropolitan University.

Ito, A. (2017). What qualities are required of school counselors to promote collaboration with teachers in providing socio-emotional support for children?: Based on a survey of Japanese school counselors and teachers. Evidence Based School Counseling Conference, March 10-11, 2017, San Diego.

伊藤亜矢子 (2016). 「スクールカウンセラーが燃え尽きないために学ぶべきことは何か スクールカウンセラー調査に基づく実践力養成への提案」日本心理臨床学会第35回秋季大会 2016年9月4~7日 パシフィコ横浜(神奈川県).

菖蒲知佳・伊藤亜矢子 (2016). 「自由な校風」は何を生徒にもたらすのか 学校生活の主観的体験とレジリエンスに着目して」日本心理臨床学会第35回秋季大会 2016年9月4~7日 パシフィコ横浜(神奈川県).

Ito, A. (2016). Importance of Classroom Climate in Promoting Mental Health among Japanese Students: Teacher Attitudes and Management Style. 31st International Congress of Psychology, July 24-29, Pacifico Yokohama.

Miyabe, M. & Ito, A. (2016). How the teacher's image of a classroom is formed: Teacher interviews using the Classroom Climate Inventory data. 31st International Congress of Psychology, July 24-29, Pacifico Yokohama.

Shimoda, Y. & Ito, A. (2016). Application of the Social Emotional Health Survey to Japanese Youth. 31st International Congress of Psychology, July 24-29, Pacifico Yokohama.

Shobu, C. & Ito, A. (2016). Student's subjective experience of "Nondirective" school climate: From the interview of two generations of graduates from the same high school. 31st International Congress of Psychology, July 24-29, Pacifico

Yokohama.

Ito, A. (2016). Promoting School Crisis Prevention for Safe and Positive School: through Counselor / Teacher Training and Psych-educational Program Development. 38th annual conference of the International School Psychology Association, July 20-23, University of Amsterdam.

伊藤亜矢子・中根由香子・荒木史代・樋渡孝徳・窪田由紀(2015). 「心理教育における学校臨床心理士の役割 その心理士が果たせる役割と利点の整理」日本心理臨床学会第34回秋季大会 2015年9月18~20日 神戸国際会議場(兵庫県).

②中根由香子・伊藤亜矢子・荒木史代・樋渡孝徳・窪田由紀(2015). 「心理教育における学校臨床心理士の役割その 教案・教材作成時にカスタマイズできる部分と観点の抽出」日本心理臨床学会第34回秋季大会 2015年9月18~20日 神戸国際会議場(兵庫県).

②荒木史代・伊藤亜矢子・中根由香子・樋渡孝徳・窪田由紀(2015). 「心理教育における学校臨床心理士の役割その 心理教育を体験した学校の教師インタビュー調査の結果から」日本心理臨床学会第34回秋季大会 2015年9月18~20日 神戸国際会議場(兵庫県).

②宮部緑・伊藤亜矢子 (2015). 「中学校における教師 生徒間の学級認知の一致・不一致に関する要因の検討 教師コンサルテーションでの認知的な働きかけに向けた基礎研究」日本心理臨床学会第34回秋季大会 2015年9月18~20日 神戸国際会議場(兵庫県).

②伊藤亜矢子 (2014). 「効果的なスクールカウンセリングに必要な専門性の探索 スクールカウンセラー調査の結果から」日本心理臨床学会第33回秋季大会 2014年8月23~26日 パシフィコ横浜(神奈川県).

②中根由香子・伊藤亜矢子 (2014). 「スクールカウンセラーの全校型支援にむけた予防的取り組み 対象学級のニーズに応じた心理教育プログラムの効果検討」日本心理臨床学会第33回秋季大会 2014年8月23~26日 パシフィコ横浜(神奈川県).

②Ito, A. (2014). School counseling in Japan: Collaboration with teachers using special knowledge of clinical psychology is unique to school counseling in Japan. Cyber-symposium on "school counseling around world". The conference of Korean Counseling Association, August 13th. ソウル(韓国).

〔図書〕(計6件)

伊藤亜矢子, 新曜社, 学校教育とカウンセリング, 学級風土と学級経営, 学級はどう変化していくか, 藤澤伸介(編) 探究!

教育心理学の世界, 2017, 102-105, 108-113, 236-237.

伊藤亜矢子, 教育出版, 学級風土のアセスメント, 日本学校心理学会(編) 学校心理学ハンドブック第2版「チーム」学校の充実をめざして, 2016, 116-117.

伊藤亜矢子, 金剛出版, スクールカウンセリングでの支援 学校現場の支援における現実, 下山晴彦・村瀬嘉代子・森岡正芳(編) 必携発達障害支援ハンドブック, 2016, 338-342.

伊藤亜矢子, 放送大学教育振興会出版部, 第10章海外のスクールカウンセリング, 第11章コミュニティ心理学, 第12章コミュニティ心理学, 第15章心理教育 倉光修(編著) 学校臨床心理学・地域援助特論('15), 2015, 176-190, 191-205, 206-220, 259-272.

伊藤亜矢子, 東京法規出版, 小冊子いじめをなくそう いじめはなぜなくなるの, 2014, 30.

伊藤亜矢子, 金剛出版, いじめに直面する親の支援, 橋本和明(編) 子育て支援ガイドブック「逆境を乗り越える」子育て技術, 2014, 196-208.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

伊藤亜矢子(2018). スクールカウンセリング・ワークブック ver.1.

伊藤亜矢子(2016). さまざまな出会いの時、四月 出会いを育む学級づくり, 児童心理, 70(6) 金子書房, 1-10.

伊藤亜矢子(2015). ふれあいのあるクラスはどう育つか あたかな人間関係が築かれる集団, 児童心理, 69(5) 金子書房, 12-18.

伊藤亜矢子(2015). 安心・安全な学校体制の準備編 スクールカウンセラーの積極的活用アイデア 提言スクールカウンセラーの特性を理解したうえでまずは管理職が積極的な活用を, 総合教育技術, 69(15) 小学館, 22-25.

伊藤亜矢子(2014). 『安全基地』としての学級, 児童心理, 68(5) 金子書房, 19-25.

伊藤亜矢子(2014). スクールカウンセリングでの発達障害への支援 学校現場の支援における現実, 臨床心理学, 14(1) 金剛出版, 56-60.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤亜矢子 (ITO, Ayako)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号: 50271614

(2) 研究分担者

下田芳幸 (SHIMODA, Yoshiyuki)

佐賀大学・学校教育学研究科・准教授

研究者番号: 30510367